

実践報告：テーマ・プロジェクト「健康福祉文化と生活設計」

井上 直美、久保 夏美、信保 友美、津崎 智之、野村 健太
 浜崎 祐輔、藤井 歩美、藤田 貴文、前田 晴子、宮山 博久
 指導教員：安田 忠典

はじめに

本稿は、関西大学文学部におけるテーマ・プロジェクト教育「健康福祉文化と生活設計」履修者による2006年度の活動報告である。テーマ・プロジェクト教育とは、以下に示す文学部改革の一環として採用された、特定のテーマについて2年間継続的に学ぶゼミ形式の授業で、履修学生は各自が所属している専修のゼミではなく、テーマ別の「プロジェクト演習」というゼミで卒業論文を作成するというものである。

創立80周年にあたる2004年、関西大学文学部は、従来の8学科を廃して総合人文学科1学科のもと10専修が展開する新体制に移行し、多様なディシプリンと活発なプロジェクトによる21世紀の人文学の拠点をめざして生まれ変わることになりました。こうして始まった改革は、2005年には「テーマ・プロジェクト教育」の開始、2006年度には5つの新専修の設置へとつながっています。(2006年度版関西大学文学部案内より)

われわれ身体運動文化専修は、2006年度、このテーマ・プロジェクト教育に「健康福祉文化と生活設計」というテーマを開講した。これは、身体運動文化専修の前身である「体育学教室」が開発してきた「付加価値追求型授業開発」「生涯スポーツ研究ステーション計画」などを継続・発展させた、公開授業や協力団体へのインターンシップ授業など学生

参画を軸とする「新しい学びの様式」を展開しようというものである。

本プロジェクトの履修者は10名で、身体運動文化専修所属はそのうち5名、残る5名は他の専修からの履修であった。男女比は5対5、運動部所属者は4名（男3、女1）である。

このようなメンバーで、3年次にあたる2006年度の1年間、いくつかの実践の場への参画を試みた。以下には、参画した行事ごとに学生たちの報告を掲げる。

吹田市立高野台小学校宿泊学習に参加して

浜崎 祐輔
 津崎 智之

活動の概要

2006年10月19日から20日にかけて、吹田市立高野台小学校五年生の宿泊学習に学生二名で参加した。目的は宿泊学習中の子どもたちにレクリエーションを提供することで、学生自らがレクリエーションの企画から進行までを担当した。大学で学んだ知識を実践する場であり、大変貴重な体験となった。

活動の趣旨

大学で学んだ方法論を駆使し、現場で実践することは、いわば体験学習であり、机上の学問だけでは学ぶことのできない、質の高い学びが期待できる。さらに、このような活動は、私たち学生にとって素晴らしい体験とな

るだけでなく、学生が主体的に社会に働きかけることで、地域社会の貢献にも繋がり大変意義深い活動であるといえる。また、こうした活動は大学と地域社会が連携することで実現した新しい学びの様式であり、これからこのような機会が増えるよう微力ながら貢献できればと思う。

当日の活動内容

提供するゲームについては、前日に小学校の先生方と打ち合わせを実施し、当日の流れやどういった内容のものにするのか大まかに決めておいた。また小学五年生の宿泊学習ということで、その目的に即した内容にするよう心がけた。

当日は、生徒が約80人参加しており、レクリエーションは教室を借りて行った。全員が入れる規模の教室だが、走り回るほどのスペースはないため体を動かすゲームは控えた。また前日小学校の先生と打ち合わせをした際、複雑なルールは子どもたちには理解しにくくゲームが成立しないということだったので簡単なゲームをすることに決めた。具体的にはフラフープを使ったゲーム等で、以下は行ったゲームの内容である。

- 輪送りゲーム—1グループ8人前後になるようグループ分けをしたのち、各グループで手を繋いでもらう。その繋いだ手との間にフラフープを入れ、手を繋いだまま次の人に送っていくゲーム。ゲームが終わった順番に順位をつけた。
- 輪下ろしゲーム—8人のグループで円になるよう並んでもらい、両手の人差し指のみでフラフープを支えてもらう。このとき全員の指がフラフープから離れないことが原則で、みんなでフラフープを下ろしていくゲーム。このゲームもグループごとに順位をつけた。
- ハイで拍手—ハイの合図で全員が拍手し、それ以外の合図では拍手をしては

いけないゲーム。ハイの合図をする人は固定した。



写真1 宿泊学習の様子

プログラムを終えて

いくら小学生とはいえ80名の大人数。当日どのように私達に接してくるか、やはり不安であった。しかし、それ以上にどのような展開になるか楽しみであった。

実際に子どもたちにレクリエーションを提供してみて、予想以上の反響があり驚いた。はじめはルール説明や導入の段階では話を聞いてくれない子どもが目立ち、本当に成功させることができるか内心不安だった。しかしゲームが始まると、私たちの言ったことを素直に聞いてくれ協力してくれたので大変な盛り上がりとなった。レクリエーションの時間が終わっても「もう一回やる！」と言い出す子もいてとても嬉しかった。

反省点は順位をつけようとしたことで、勝敗にこだわるあまりズルをして一番になろうとする班などが出てきてしまい、「ゲームを楽しむ」という本来の目的から外れる恐れが出てきたので、すぐに順位制を廃止した。

そして、もう一つ。もっと身振り手振りを交えて説明した方が良かったと感じたことである。自分では伝えたつもりでも、子どもたちには完全に伝わっていなかった場面があり、ルールの説明などにやや時間を費やしてしま

い思い通りに進行できなかった。自分なりに子どもの目線で考えたつもりでも、「これくらい説明しなくてもできるだろう」と自分の価値観で判断していたところがあり至らない場面がいくつかあったように思う。

全体を通しての感想

振り返ってみると、多少うまくいかなかった場面もあったが、自分たちが考えたプログラム通りに進行することができ、大成功で終わることができたと思っている。年代の違う人とコミュニケーションができたこと、また何かを提供する側の苦勞を知ることができたのが大きな収穫である。先生方からは数々お褒めの言葉を頂戴し、素晴らしい体験をさせてもらったと感謝している。

大勢の子ども達とコミュニケーションをとるには、ものすごいエネルギーが必要で、実習を終えた後はとても疲れた。常にその子ども達を引率している学校の先生は本当に凄いと感じた。体力的にも精神的にも素晴らしい先生方であった。夜の先生方のミーティングに参加させていただき、先生方の子ども達に対する愛情が感じられ、心から尊敬できた。また、先生方から直接、教育現場の様子を聞くことができ、とても良い時間を過ごすことができた。

全体を通してみても、本当に良い経験となった。また子ども達との触れ合いのなかで、普段は指摘されないことを子ども達から言われ「自分は子ども達からはこう見られているのか」といった新たな発見もあり、大変有意義な時間を過ごすことができたと思う。何より宿泊学習に参加した子どもたちが素直に楽しんでくれたことが嬉しかった。時間にすればたったの一泊二日であったが、非常に中身の濃い二日間であった。

「体育お助け隊」 ～高野台小学校での課外授業～

宮山 博久
井上 直美

課外授業参加の経緯

2006年10月19日に、学生8名（男子：3名、女子：5名）で、吹田市立高野台小学校で課外授業を行った。

これは、これまで着実に築き上げてきた関西大学文学部身体運動文化専修と吹田市教育委員会との協力関係にもとづく事業「体育お助け隊」の一環で、これまでも、関西大学の学生が同校で課外授業を行うなど、両校には親密な協力関係が醸成されている。

今回は、五年生が林間学校へ行く間、学校に残るスタッフが少なくなるので、私たちが「体育お助け隊」として同校へ赴き、小学生と交流することになった。

事前の準備

前日の18日に小学校へ出向き、生徒数・授業時間・備品などの打ち合わせを行った。そこで、5時間目に1・2年生合同（約100名）、6時間目に三年生（約40名）を受け持つことが決まった。同校は、肢体不自由児の拠点校となっており、車椅子を利用している児童もいることが知らされた。

さらに、先生から児童が普段遊んでいる様子をうかがい、学生で話し合った結果、当日は「ドッジボール」を行うことにした。

当日の活動

はじめに、小学生の前で自己紹介をして、準備体操を行った。その後、簡単なゲームでチーム編成をして、1チームに2～3人の学生が加わった。やはり小学校低学年ということもあり、指示がきちんと伝わらず、ここまで予定以上の時間を費やしてしまった。

ドッジボールが始まると、ほとんどの児童